

山中 進 著

『熊本の地域産業』

成文堂 2013年9月 256頁 4,200円＋税

地域と産業の間に取り持たれる諸関係と、その地域の特徴を解明することは、経済・産業地理学の大きな課題の1つである。本書はこの点に立ち、熊本県という場所を対象に、そこに展開する諸産業の生成と変容を描いている。筆者は本書に貫かれるこの姿勢を、「地域産業からみた熊本の地域論」と規定している（まえがき）。長らく地域の経済的事象を考究してきた著者の、地域に対する視線が明確に示されている。

その一方で、著者には本書を一種の地誌として著す意図があることが読み取れる。地誌はある地域の個性を解明することを目的とするが、現在の地理学は地域のもつ多様性の前に無力感に襲われ、地誌を放棄しているようにさえ見える。そうした学問上の隘路を突破するためにも、筆者は地域を観察したり考察したりする視点・視角が重要であるとしている。経験豊かな経済地理学者である筆者は、熊本の地誌を編むために、地域に展開する諸産業をその視点に据えた。この文脈では、本書は熊本県の経済地誌としての性格を有する。

本書は2部からなり、前半の第I部では熊本県が日本最大の生産地域であるい草およびその加工業（い業）の産地形成と生産構造について論じている。後半の第II部では熊本県の特徴的な地域産業の生成・発展を、近代以降の都市形成と関連づけながら分析している。

以下に本書の構成を示す。

第I部 い業国際化と熊本産地の構造的課題

はじめに

第1章 い業産地の地域的動向

第2章 熊本県い業産地の形成と展開

第3章 大規模新興産地の形成要因と岡山・広島産地の変容

第4章 大規模新興産地の構造的課題

第5章 い業国際化と産地の課題

第6章 熊本産地の振興策

おわりに

第II部 地域産業の生成と展開

第7章 明治前期の都市と農村

第8章 地方都市熊本の近代工業

第9章 戦後の熊本県製糸業の動向

第10章 鉄道の開通と木炭石灰業の発展

終章

第I部に通底する課題は、い業の先進産地である岡山・広島と、後発産地である熊本の比較論である。熊本が後発であるにもかかわらず、なぜ日本最大のい業地域となりえたかが、まずもっての大きな課題であり、次いでい草・い製品の輸入自由化に対する産地の対応が検討される。

第1章ではい草・い製品の全国的な生産動向を統計から把握し、熊本産地の地位を確認する。次いで第2章では明治期以降の熊本産地の形成過程を、県統計書などの歴史史料をトレースすることで復元している。ここでは熊本産地が農家副業に起源を有し、い草栽培とい製品生産が一貫して行われてきたことが示され、このことが産地問屋を有する岡山・広島産地との大きな違いであることが指摘される。

第3章では熊本産地の特徴を明確化する意図で、岡山・広島産地の分析に取りかかる。分析の素材として、熊本県農業試験場の報告書が取り上げられ、熊本産地が主産地としての地位を築いた要因が考察される。ここでも岡山・広島産地ではい草生産と加工が、経営上でも地域的にも分化していることが強調される。また、高度経済成長期における瀬戸内地域の工業化にともなう兼業化の進展で労働力が不足し、生産環境が悪化したことが、熊本産地を相対的に優位な立場に押し上げたことと指摘している。

第4章は、経済地理学的分析の真骨頂ともいえる。すなわち熊本産地の構造的課題がここで明らかにされる。熊本産地は相対的な大規模経営と機械導入による省力化を進めてきた。すなわち、スケールメリットの追求によるコストダウンを標榜した産地が熊本である。しかし、量産指向の産地には品質の低下が常につきまとう。また、農家副業から始まった熊本産地は、い草・い製品の流通市場を農協、すなわち生産者団体が掌握してきた。しかし、1970年代からは私設市場が成長し、90年代には広島などから大手の流通資本が参入し、流通市場は多様化している。

第5章および第6章は貿易自由化にともなう生産者の対応と産地の変化を論じている。中国製品は先進産地の産地問屋に利用され、従来熊本産地

が担ってきた廉価製品の量産という役割を肩代わりした。熊本産地ではこうした動向に対して、高品質化・競争力の強化・流通の改善などで対応しようとしている。また、生産者の中には少数ながら意欲的な農家が存在し、産地の存続のため、県・生産者団体・農家の各段階でさまざまな取り組みが試みられている。

第Ⅱ部では、熊本の都市的発展と地域産業が関連づけて論じられる。第7章では、産業の分析に先立ち、熊本市の都市的発展が区誌・郡村誌によって確認される。また、第8章では城下町に起源を持つ都市工業の展開が、城下町の都市構造と対照される。明治初期の熊本には行政・軍・教育の諸機能が立地したが、一方で工業の集積は相対的に稀薄であった。また、士族授産による工業化は進展しなかった。農村部では、みかんや筵、醤油や酒の醸造といった、現在の産業の萌芽がみられた。

第9章では1990年代に廃業した工場の史料分析により、製糸業の戦後の動向を分析している。このなかではとくに労働力供給が丹念に検討され、中卒の女子労働力が周辺地域のみならず、出稼ぎ地帯であった天草や鹿児島県北西部からも吸引され、生産が合理化される1960年代後半以降には、いったんは結婚退職した彼女らがパート労働力としてふたたび確保されたことが指摘されている。

第10章では鉄道敷設と駅設置にともなう石灰業の発展を企業や業界団体の文書から検討している。

第Ⅱ部の大きなテーマは、熊本と福岡の比較論

である。九州の中央という位置的優位性を発揮して、熊本が九州の中心都市としての地位を維持できたのは大正期までであった。それに対して福岡は、九州の玄関口、アジアへのゲートウェイとして九州の拠点的性格を強めた。

このように見ていくと、本書では対象地域内部における地域差や多様性よりは、熊本と岡山・広島、あるいは熊本と福岡といった、他の地域との差異を明確にすることに力点が置かれていることがわかる。本書が目指す地誌のあり方が、著者のこうした立ち位置から読み取れる。

本書のもうひとつの特徴は、県統計や農業試験場報告などの公式史資料に加え、第9・10章に見られるように企業・同業団体の記録を発掘し、それを丹念に読み解いて、地域や産業の発展・変化を再現する点にある。とくに第Ⅱ部の各章においては、こうした史資料が縦横無尽に駆使され、近代化初期の都市構造や産業の実態を復元することに成功している。

すでに失われた過去の産業活動を、現在の景観や土地利用に見いだすことは困難であるし、明治期のこともとなると、もはや聞き取り調査によることもできない。経済の急激な変容に振り回されてばかりいる最近の経済地理学分野の研究者にとって、歴史史料の取り扱いが「苦手分野」に属するが、筆者はそれをお手のものとして自由自在に活用している。本書は熊本の地誌として読まれるにとどまらず、経済史料の読解についてさまざまな示唆を与えてくれる一書である。

(須山 聡)